

イデックスオイルレポート ~For a week~

2022/6/10作成 (株)新出光

【概況】<ロシア産原油年内輸入禁止~中国ロックダウン解除>

●3日、欧州連合(EU)はウクライナに進行したロシアへの追加制裁を正式決定しました。ロシア産の原油を6カ月以内・石油製品は8カ月以内に輸入停止するとの事です。これを受けて、供給不安が改めて高まり原油が買われ相場は118.87ドルへ上昇しました。

●6日、サウジアラビア国営石油会社サウジアラムコは5日、7月分のアジア向け原油の公式販売価格(OSP)を引き上げると発表。値上げ幅は前月比2.10ドルと市場予想を上回りました。これを受けて需要見通しに対する強気な見方が拡大し、7月物は米時間同日夜に一時120.99ドルと約3カ月ぶりの高値を更新しました。しかしその後は利益確定の売りが出て、相場は118.50ドルで終わりました。

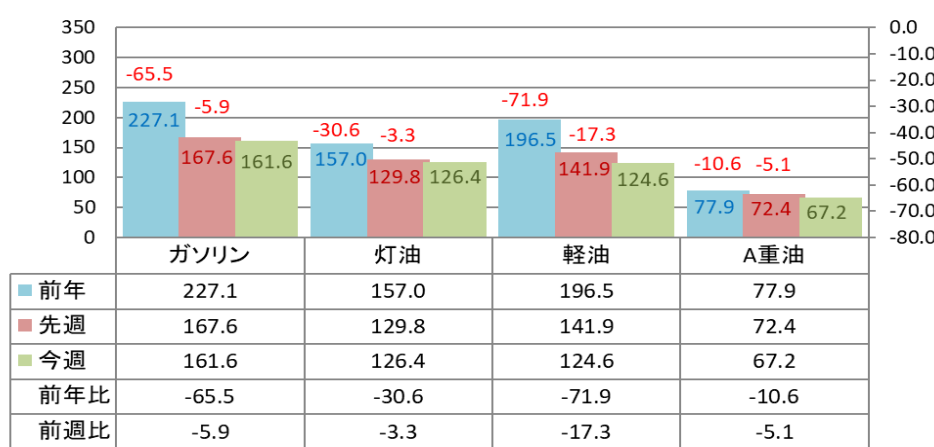
●7日、中国・北京および上海市で新型コロナウイルス感染拡大抑止に伴うロックダウン(都市封鎖)が解除され、経済活動が本格的に再開すればエネルギー需要が回復すると見られています。欧州連合(EU)がロシア産原油の輸入を年内に原則禁止する一方で、石油輸出国機構(OPEC)加盟・非加盟の産油国で構成する「OPECプラス」は増産ペースの大幅拡大に消極的な姿勢を示しています。この状況下、需給引き締め観測を追い風に原油買いが膨らみ、相場は119.41ドルへ続伸しました。

●8日、EIAが発表した週間在庫統計では、ガソリン在庫は80万バレル減と市場予想の110万バレル増(ロイター通信拡大版調査)に反して取り崩しとなりました。全米ガソリン平均小売価格が8日に過去最高値を更新したにもかかわらず、ガソリンの需要は依然として高く、需給が今後も引き締まるとの見方から、原油相場に買いが集まり相場は122.11ドルへ続伸しました。

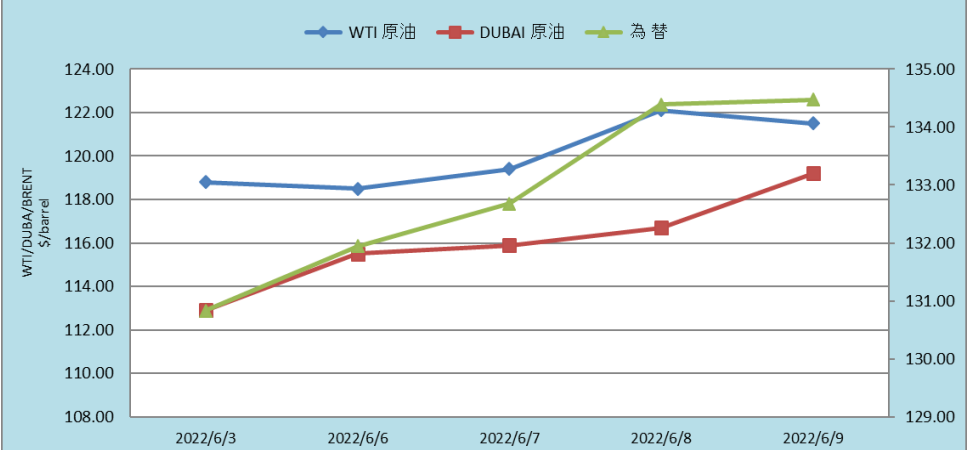
●9日、中国最大の経済都市上海市は9日、南西部の一部地域を11日午前から封鎖し新型コロナウイルスの大規模な検査を実施すると発表しました。同市は1日、約2ヶ月に及ぶロックダウンの実質的な解除に動きましたが、その後経路不明の感染者が相次ぎ確認されました。同市が再び厳格な行動規制を導入すればエネルギー需要の回復が遅れるとの警戒感が相場の頭を押さえ121.51ドルへ反落しました。

6月10日 17:00現在 WTI原油 116.30ドル 為替 1ドル 135.22円

国内石油製品在庫 6月4日時点



ドル/bbl WTI・DUBAI / 為替 相関グラフ



	次回元売変動予測	
	6/16~	元売変動予測
ガソリン	➡	+3.9~+4.4
灯油	➡	+3.9~+4.4
軽油	➡	+3.9~+4.4
A重油	➡	+3.9~+4.4
L S A	➡	+3.9~+4.4

※原油コスト「6.5円~+7.0円」
 ※激変緩和補助金「-41.4円」
 ※現時点での予測です。

【製品卸価格】<元売り週間玉の販売攻勢継続>

《今週》今週の元売り仕切り改定は3社ともに原油コスト「+4.0円」、補助金「-38.8円」、都合「+1.9円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの6日時点の小売価格平均は169.8円となっております。

今週のマーケットの主役は、元売週間玉を持つ業者です。市況連動玉や元売月間玉を持つ業者は次週のコスト上昇を予想し販売を自粛し様子見を続けています。

《6月11日以降》次回の元売り改定は、原油コスト「+6.5~+7.0」の値上げ改定予測で、激変緩和補助金は「-41.4円」の見込みで、都合「+3.9~+4.4円値上げ」の改定の予測となっています。

11日以降の販売の主役は現在と変わらず元売週間玉を持つ業者です。しかし市況連動玉を持つ業者は、次回の価格改定以降の17日~18日より販売を強化すると見られています。よって元売週間玉を持つ業者は、15日までにある程度販売枠消化にメドをつけたいところです。6月のサウジ調整金は-4.0円で今月末の改定に加算される予定の為、逆仮需になる事が想定されます。最終週は、29日に近づくとつれオーダーは日毎に減り価格改定後の30日以降にオーダーは、集中すると思われローリー線りも混雑が予想されます。

【次世代エネルギー】<大気汚染物質を抑制した火力発電用ボイラ向けバーナのアンモニア専焼に成功>

航空エンジン部品・大型ボイラー・ターボチャージャーに強い(株)IH Iが、この度燃焼時に排出される大気汚染物質を抑制した火力発電用ボイラ向けバーナのアンモニア専焼に成功したと発表しました。新たなエネルギーとして注目されているアンモニアは、多量の窒素分を含んでいるため、燃焼する際にはNOxの排出濃度が上昇する懸念があるほか、難燃性であるため安定燃焼が課題となっていました。同技術ではバーナの構造やアンモニアの供給方法を工夫することで石炭専焼時と同程度にNOxの排出濃度を抑制すると同時に、有毒な未燃アンモニアの発生を抑制するアンモニア専焼に成功しました。今回の実験でアンモニア専焼技術の実用化が大きく前進すると言われていています。今後は、バーナ構造の改善やボイラ性能に与える影響の評価を実施し、25年の専焼バーナの実証試験を目指すとの事です。

【出典】

① <https://finance.yahoo.co.jp/news/detail/20220518-00935805-fisf-stocks>